

令和二年六月一日発行 第三十巻第六号 通巻第三四八号（毎月一回一日発行）
平成三年九月十八日第一種郵便物認可

槐 かい

岡井省二創刊

令和2年6月号



ビットコイン

高橋将夫

仏にも神にも春の埃かな
きさらぎやきらりきらりと沙羅の風
初蝶の消えてしまつた虚脱感
鳥雲に入りたるごとき喪失感
春の海大王烏賊と原潜と
翼なきものが飛びゆく春の天
裏側にまだゐる兎春の月
珍宝の品定めする利休の忌
剣菱を廻し飲みする利休の忌
しばむのはいやと風船自爆せり
霞から取り出すビットコインかな

槐安集

加藤みき

春風やゐるべき人の見あたらさず
櫻に雪人間のちえおよぼざり
夜目に白し吉野櫻の山また山
軽石は妣の遺品ようららけし
夕永しわれにこんな日来てゐたり

中島陽華

往還も雪化粧ひをり阿弥陀堂
大皿の轆轤廻すや龍天に
留守番や春の日差しを臍に
とりどりのマウスピースや養花天
はなの名を知らず臙の石の上

近藤喜子

うららかや天国歩く人の数
蝶々のひらりひらりと浮世かな
茎立や心の視点かへてみる
老櫻の靈氣わが身に貰ひけり
動けずにをり佐保姫に影踏まれ

瀬川公馨

雉きてうすくれなゐの虚空かな
露の臺ないものねだりインゴット
思案顔の女をりけり花便り
文旦の嫁入りしたる隣かな
花ミモザ仮託の猫の帰り来し

竹内悦子

春昼のベッドの上を住処とし
石切の神の御札や鳥雲に
息吸うて吐いてCT春臙
伏見より便りや雨の沈丁花
急ぐ雲急がぬ雲や雛祭

雨村敏子

まぼろし堂におし寄せてくる霞かな
世の音の遠くにありて櫻かな
葱の花宝珠の形並びけり
土佐水木の花や一身こんじきに
桃の花母あるときの桃の花

柳川晋

春眠や首長竜の頃のこと
リアルとは出合ひ頭に藁ゆる
三月十一日より前と後
観る人のゐない分だけ花笑ふ
哲学はポストコロナへ春一番

熊川暁子

薄氷をやぶり大志がほとぼしる
綿虫が湧いて此の世が呪文めく
お水取若狭の月を汲み置きぬ
たんぼぼの真上武装のオスプレイ
明るさを地に置くごとし春の山



江島照美

雛祭をなごは妖と清を生き
彼の人は言葉の種を蒔く詩人
時として迷ひ道なり蜷の道
鳥の巢や愛の形の千々乱る
流し雛別れ難しと戻りやんせ

岩下芳子

石鹼玉有るか無きかの風捉ふ
春一番転がるものを追ひかける
店の間に代代の雛揃ひけり
源流へこの径険し風光る
ものの芽や蹠も脳もこそばゆし

寺田すず江

木瓜の花枝やはらかく絡みあふ
啓蟄や余計なことは言はずとも
種種を四捨五入して磯遊び
白昼を飛ぶ星のあり遍路道
寄居虫やホームステイのままならず

近藤紀子

この星はつねに未知なりかぎろへる
横柄にわれを呼びをる春鴉
瀬戸内の島つぎつぎと霞みけり
馬上より手を振るは誰蒙古風
一分半二百円春を見せると千里鏡

岩月優美子

北開き心に風を通しけり
ヴィーナスの横たふ容春の雲
春興や未知の世に居る神と鬼
ゴンドラに揺らるる心地春眠り
春新皇コノナウリスなのに旅のはなしはお預けに

竹中一花

鳥の群羽搏く朝や風光る
春寒の悟りの窓に雀二羽
浮雲にかかる茜や鳥帰る
手水舎の春水道真誕生院
鉄輪かなわのい井に春雨や命婦塚

近藤紀子

春愁つぎに会ふ日を決めぬまま
ねんねこの衿のビロード母を恋ふ
利休の忌五枚切りパン買うてをる
あかつきや桃の蕾の開く音
鳥雲に晩節の思慕はるかなり

前田美穂子

古里の土間は広きや菜飯食ふ
梅散りて古木の勇姿あらはにす
ふらここの天を破らむばかりなり
草青む土の香の立つあたり
志野袋忍ばせてをり立子の忌

中田禎子

白銀の遠嶺や桃の花盛り
囀りや羽根のただよふ心字池
戸を叩くいだいだら法師春一番
動き初む大地や満農池おぼろ
脱皮してミモザの花を纏ひたり

吉田順子

甘茶仏身は小さくも無限かな
花吹雪この世あの世の風を呼び
囀りや仏足石にうす日射す
白妙は神のみこころ春の滝
雨後の陽にぐんと伸びたる露の臺

槐市集

井上静子

惜春の犬の脚跡大きかり
子煩惱ただ切切と鴉の巢
遠き日の柱の傷や里ぬくし
帰り道春一番を背ナで受く
柳の芽惑はぬ道を歩きけり

今井充子

巢籠りや閑かなる街多かりき
ゆさゆさとひよる長き松春一番
菱餅を重ねし妣の巧みな手
草餅や中将姫の伝説よ
春耕や花苗待ちて鋤の音

岩田洋子

露味噌や手の皺深くなつてをる
春日影地蔵に聞かす良き話
半日を目白と遊ぶ共白髪
桶の水音たてて飲む競ひ馬
春雨や天狗杉なる大樹にも

植木戴子

桜守古木の前に佇めり
草木染を靡かせてをる春の風
花曇図書館の窓開いてをり
桃の花八角形のコースター
鉄鍋を磨いてをりし苜蓿



大塚たきよ

窓越しに中覗きをる春の蠅蠅
柳の芽児やぎにぎにぎす母の背
春昼や着信音に睡魔消ゆ
花まつり所作かたくなる僧の影
石段の途中ふり向く孕猫

岡田桃子

三月のあの日へ祈る頭かな
七十二歳何の不足のおでん酒
煮物酢の物大根仕舞ひの昨日今日
乾物を仕込み消灯冴返る
春蘭の根元探るや青蕾

荻布 貢

女ひとり深みどろが泥池いけの春の雨
由緒読む多賀の大社や桃の花
逃水や見果てぬ夢をつかむまで
山葵田や絶えぬせせらぎ渡る風
ウイルス禍馬耳東風の猫の恋

久保夢女

春起こす呪文一人に一つある
オーイ空オーイ雲よと春仰ぐ
海と陸分かつ岬よ野水仙
存分にご存分にと春の波
春風の尻尾とらまへりボン結ぶ

阪倉孝子

掌へ大き春置くメールかな
花あれば花の心にゆだねたき
脇役の身上なりしかすみ草
吊皮へ三月の黙揺れにける
光と影の乱舞ありけり花浄土

柴田靖子

水ぬるむ万物目ざめの時なりし
春がすみ天女衣をなびかせて
ながめぬて我もいつしかいかのぼり
芝焼きてあらたな明日を楽しみに
甘茶の杓とりし日遠くなりけり

槐 集

高橋将夫 選

己が影鮮やかなりし春の土 枚方 阪倉 孝子

温暖化に気づき始めし桜貝 大阪 藤田美耶子

陽炎を抜けて細身となりける
螺子巻くや体内時計春を告ぐ
センサーの見守る命薬ゆる

露のたう体内時計のめざめけり
みつめ合ふこともありしか内裏雛
ウイルス禍にざわつく心梅二月

光と影の乱舞ありけり花浄土
春愁は己がつくるパズルかも 大阪 平野 多聞

現し世と来世のあはひ落椿
万策の尽きて頬杖落椿 福井 時澤 藍

いぬふぐり縁は切るもの結ぶもの
どん底は聖なる空間蓮匂ふ
雪解風徹頭徹尾反骨で
眼の色が五感を凌駕恋の猫
蛇穴を出でまづは所信表明 守口 三木 亨

マスクして憂き世の風を疎みけり
春耕や地球の放つ加齢臭
閉塞の星にありても麦青む
春光に研師の技の光りをり
ものの芽のほぐるる音や暁に 岡崎 柴田 靖子

ふつと息かければ解ける蠅の道
老いし父訪ね和解の目貼剥ぐ
こそばきと拾ふ骨いひ春夕
揮身のバンジージャンプ諸子散る

一人こぐふらここ風を友とせし
心地よき日ざしの中に春の蠅
風光るをどりをどつてランドセル
春雨やかたき唇ほころばず

春耕や地球の放つ加齢臭 時澤 藍
世が世なら、耕せば土の匂いが香り立つであろうに。地球は病んでいるのかもしれない。そんな星にあっても未来を信じて麦は青むのだ。〈閉塞の星にありても麦青む〉

センサーの見守る命薬ゆる 阪倉 孝子
集中治療室で病氣と闘っている一つの命。季語の「薬ゆる」が回復への希望を感じさせる。

〈陽炎を抜けて細身となりけり〉の句、陽炎の中と外での姿の違いに着眼したところがユニーク。

〈己が影鮮やかに春の土〉の句、春の土に置く自らの影が文字通り鮮やかに目に浮かぶ。

春愁は己がつくるパズルかも 平野 多聞
心が浮き立つ春なのに、なぜかふと感じるものうい哀愁。「己がつくるパズル」は春愁の核心に迫っている。

〈いぬふぐり縁は切るもの結ぶもの〉の句、確かに結ぶ縁があれば、切る縁もあるのが世の習い。

蛇穴を出でまづは所信表明 三木 亨
蛇が穴を出で最初によったことが所信表明。この蛇、どうやら長い冬眠時代を無為に眠っていただけではなさそうだ。

〈老いし父訪ね和解の目剥剝〉と〈揮身のバンジージャンプ諸子散る〉は、上五・中七から下五の季語への飛躍が絶妙。

温暖化に気づき始めし桜貝 藤田美耶子
地球温暖化が桜貝に気づかれるところまでできてしまった。美しい桜貝にまで心配をかけるようでは世も末か。

心地よき日ざしの中に春の蠅 柴田 靖子
蠅はなんとなく不潔でうとうとしイメージだが、「心地よい日差しの中の蠅」といわれると親しみを覚えるから不思議。〈春雨やかたき唇ほころばす〉では春雨という季語の本情が具象的に捉えられている。

土筆んぼ桃源郷に続く道 出利葉 孝
桃源郷といえば男なら一度は行ってみたい夢の世界だが、土筆の道というから案外身近にあるのかもしれない。

向ひ風ちからに変へていかのぼり 阿部さちよ
風があるから凧は上がり、風が無ければ上がらない。当り前ではあるが、どこか人生に通じるものを感じさせられる。

〈春灯の廃炉処理水澄みにけり〉は原発の廃炉に対するシニカルな一句。

コロナ禍のニュースの脇に梅便り 田中 信行
本来なら梅便りのニュースが主役であるはずなのに、コロナウイルスのニュースで紙面が埋め尽くされている。こうしている間にも、事態は刻々と悪化している。